

「ポンサーワダーン」(王朝年代記) についての一考察

石 井 米 雄*

Notes on *Phraratchaphongsawadan*

Yoneo ISHII*

This brief note attempts to delineate the process by which the conventionally accepted periodization of Thai history based upon the shift of royal capitals has been formulated from the limited source materials available, and thereby to remind students of

Thai history of the importance of internal textual criticism of historical sources, as was aptly pointed out by Dr. Nidhi Aeusrivongse in his recent studies on the history of Ratanakosin dynasty.

はじめに

タイ人歴史家チャーンウィット (Charnvit Kasetsiri) は、タイの伝統的史書に、「タムナーン」(tamnān) と「ポンサーワダーン」(phongsāwadān) というふたつの異なった伝統があることを指摘した [Charnvit 1976a]。前者は「仏教史」(the history of Buddhism) であり、後者は「王朝史」(dynastic history) である。「タムナーン」系列に属する歴史書 (tamnān history) は、たとえば16世紀に書かれたパーリ語の史書 *Jinakālamālī* (『ジナカーラマーリー』) にその例がみられるように、ブッダによって始められた仏教が、*Mahāvamsa* (『大史』) や *Dīpavamsa* (『島史』) など、スリランカの史書に記された経緯を経たのちビルマに渡り、さらにタイに伝えられ、そこにおいて歴代国王の保護のもとに繁栄す

る歴史が語られる。「タムナーン」の主たるモチーフは仏教である。たとえ国王の治績や戦争が語られるとしても、それは仏教史を彩る背景にすぎない。これに対し「ポンサーワダーン」系列の歴史書 (phongsāwadān history) は、王朝 (rāṭchawong=dynasty) の歴史であって、ふつう王都の建設に筆を起し、これに続いて歴代の王の治績を編年体で語るという形式をとる [ibid.: 11]。もちろん「ポンサーワダーン」においても、寺院の建立、修復、カチナの寄進等々、仏教関係の記事に多くの紙幅が割かれていることは事実であるが、その目的は仏教の讃仰自体にあるのではなく、たとえば国王の崇仏行為の記述を通して王権の正統性を主張するなど、力点はあくまでも王権の側におかれている点で、「タムナーン」とはその観点を異にしている。こうしたタイの伝統的歴史記述のふたつのカテゴリーに対し、近代的歴史学の方法に基づいて記述される歴史は「プラワティサート」(prawatisāt) と呼ばれる。

* 京都大学東南アジア研究センター; The Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University

本稿は、タイの伝統的史書の一類型をなす「ボンサーワダーン」の基本的性格を解明し、これを歴史記述のための史料として利用するにあたって留意すべき若干の問題点を指摘することを目的として執筆される。

I 『アユタヤ王朝年代記』

パレゴア (Pallegoix) の *Grammatica Linguae Thai* (『タイ語文法』) [1850] によると、19世紀中葉、バンコクに流布していたタイ語年代記は *Phongsāwadān* (『ボンサーワダーン』) と呼ばれ、2部よりなっていたという。第1部は *Phongsāwadān Mūang Nūa* (『北方諸国史』) と題されるもので、ゴータマ・ブッダの時代に筆を起し記述はアユタヤの建国に及んでいるが、その内容は荒唐無稽な伝説 (*historia satis fabulosa*) である。これに対し第2部は、アユタヤ建設から1834年までの歴史を忠実に叙述 (*satis fidelis narratio*) している。パレゴアは『ボンサーワダーン』第2部の表題を示していないが、『タイ語文法』第28章の *Catalogus Praecipuorum Librorum Linguae Thai* (『タイ語典籍目録』) のなかに、『北方諸国史』とならんで “*Sayāmrāṭchaphongsāwadān*” という表題の *Annales Regii Regni Siam* (『シャム王国王朝年代記』) があげられているところから、これが同書の表題であったことが推定される(以下これを「パレゴア本」と呼ぶ)。表題は「シャム王朝年代記」の意である。

この『シャム王朝年代記』は、712年にウートン侯が即位してプラ・ラーマーティボディを号したという記述で始まる。ここに示された年次は、パレゴアが「宗教暦」(*aera religiosa*) に対して「行政暦」(*aera politica*) とした、いわゆる「小暦」(*chunlasakarāt*) で、かれはこれを西暦1350年に比定している [*ibid.*: 160]。

パレゴアの『タイ語文法』が出版される14年前、ひとつのタイ語王朝年代記の英訳が試みられた。この英訳タイ語年代記は、1836年から1838年にかけて、広東発行の *Chinese Repository* (『チャイニーズ・レポジトリ』) 誌上に連載された。訳者は a correspondent とあり、これだけで断定することは危険だが、この雑誌の常連寄稿者の名前から推定すると、当時バンコクで伝道を行っていたアメリカ人宣教師テイラー・ジョーンズ (Rev. John Taylor Jones) である可能性が高い。本稿ではこの英訳年代記をかりに「チャイニーズ・レポジトリ本」(以下「CR本」と略す) と呼んでおく。「CR本」の記述は「パレゴア本」とくらべはるかに詳細にわたるが、これもまた712年のアユタヤ建設から筆を起していることにはかわりはない [*Chinese Repository* 1836: 56]。残念ながら、「パレゴア本」、「CR本」の底本となったタイ語テキストの研究はまだ行われていない。「CR本」の訳者は序文のなかで、外国人に対し強い猜疑心を抱くタイ人が自国の歴史を隠そうとするので、底本とすべき年代記写本の入手はきわめて困難であったと述べているが、訳者の解説によると、依拠したテキストは黒色の横折本で約25冊であったという。翻訳に利用できたのはそのうち最初の10冊であった。近代的印刷術がタイに紹介されたのは1835年のことで、それ以前には書物の製作はすべて手写によっていたため、年代記の普及範囲は支配階級のごく一部に限られ、したがって対象とする読者の性格は年代記の製作者にとっては自明であった。そうしたいわば読者層の限定された著作物が、外国人という性格もその意図も不透明な者の手に渡り、無用の誤解をまねくことをおそれたのは当然であったのかもしれない。

「CR本」の翻訳後約30年を経た1864年、アメリカ人宣教師ブラドレー (Rev. Dan

Beach Bradley M.D.) はタイ語年代記の入手に成功し、これをトンプリーにあったかれの印刷所で印刷して出版した。これはタイにおいて年代記が出版された最初である。1864年という年は、かの開明的な4世王が欧米諸国と通商条約を締結して外国人の活動制限を大幅に緩和してからすでに9年ものちのことであり、かつて宣教師を悩ましたあの「外国人に対する強い猜疑心」もしだいに弱まっていたのであろう。事実ブラドレーによる「年代記」の刊行は、4世王の要請によるとさえいわれている。このとき出版された年代記のタイ語テキストは、「2冊本」(Chabap Phim Sōng Lem), ないし「モー・ブラドレー本」(Chabap Mō Bratlē) と呼ばれて、その後ひろく親しまれることとなった。

「2冊本」の主部は、記事の詳細ないわゆる「詳述本」(chabap khwām phitsadān) であるが、冒頭に記事の要点を摘記した「略述本」(chabap khwām sankhēp) がおさめられているのが特徴的である。「2冊本」の序文によると、この年代記は1850年、プラ・チェートポン寺院の住職クロマムン・ヌチットチノーロット (Kromamun Nuchitchinōrot) が3世王の命を受けて著述した作品であるという。この序文はもと「略述本」のみの序文であったものが、のちに誤解されて「2冊本」全体の著者がヌチットチノーロット親王と考えられるようになってしまったらしい。「詳述本」の著者については、これを同親王の師であるソムデット・プラパンナラットであるとするトリ・アマータクーン (Tri Amatayakul) の仮説があるが、いまだ定説となるにいたっていない [Tri 1962]。

「2冊本」におさめられたこの「詳述本」もまた、「パレゴア本」や「CR本」と同様に、小暦712年のプラ・ラーマーティボディの登位、アユタヤ奠都から筆を起している。「2冊本」の底本とされたテキストは、

ラーマ1世王の命により1795年に撰述された「小暦1157年本」と呼ばれる年代記の系統に属している。この系統のタイ語年代記には「2冊本」のほか、「パン・チャンタヌマート本」、「大英博物館本」、「パラマヌチット本」、「プラ・ポンナラット本」、「御親筆本」など諸本があるが、¹⁾ いずれも叙述が小暦712年のアユタヤ建設に始まるという点で一致している。

「小暦1157年本」と系統を異にする「タイ語年代記」のひとつに、1680年に製作された「ルアング・プラスト本」(以下「LP本」と呼ぶ)がある。「LP本」は「略述本」であるが、712年のアユタヤ建設の条の前に、686年の条を立て、大仏建立に触れている点が「1157年本」系統の諸本と異なるものの、それ以外の基本的枠組にかわりはない。以上の考察から明らかなように、現存するタイ語年代記は、いずれもウートン侯が都をアユタヤに開き、即位してラーマーティボディと号した小暦712年をもって、確実なタイ史が開始される時期としているという事実をまず確認しておきたい。なお、小暦712年という年次は、パレゴア以来長らく1350年とされてきたが、年代記にみえるアユタヤ奠都の日付である「寅年第5月白月6日金曜日」は、その後の厳密な計算によって西暦1351年3月4日であることが判明しているので、1351年とするのが正しい。

II 「ボンサーワダーン」とはなにか？

「ボンサーワダーン」の編者は、なぜアユタヤ建都以前の歴史に興味を示さなかったのか。その理由については、最近発表された歴

1) 『アユタヤ王朝年代記』の諸本については拙稿「タイ語文献について(2)——Phraracha Phongsawadan Krung Kao——」『東南アジア研究』(第2巻第1号, 1964)のほか、Busakorn [1968], Charnvit [1976a] などがある。

史家・革命家チット・プーミサックの遺著に示された見解が示唆に富む。チットはつぎのように述べている。

「王朝年代記」が「アユタヤ」以前の歴史に言及しない理由は、そもそも「王朝年代記」なるものが「アユタヤを統治した王統 (rāṭchawong < rāja + vaṃsa) の歴史の記録」にほかならないからである。執筆の目的は、ひとつの独立国家内部におけるタイ社会の発展を歴史的にあとづけることではない。この点は“phongsāwadān”という語自体に示されている。“Phongsāwadān”は、“vaṃsa” (phongsa) + “avatāra” という、ふたつのサンスクリット語の合成語である。“Avatāra” とは人間界の災苦を救うため地上に降臨したヴィシュヌ神を意味し、たとえばそれがアヨーダヤの王ラーマの姿をとって人間界にあらわれれば「ラーマヴァターラ」(Rāmāvatāra) と呼ばれる。[タイの]アユタヤにおいてもまた、この世の災苦を救うため降臨したヴィシュヌ神の権化の血脈をひく王が王都 (rāṭchathānī = rājadhānī) に君臨するものと考えられた……アユタヤ王の正式名にすべて「ラーマティボディー」(Rāmāthibodī < rāma + adhipati) すなわち「王なるラーマ」という称号が含まれている理由もここにある……それゆえ「王朝年代記」とは「アユタヤに降臨した神の化身の王統の歴史」にほかならないのである [Chit 1983: 71-74]。

チットの見解にしたがえば、「ポンサーワダーン」すなわち「王朝年代記」とは、ひとつの王都 (rāṭchathānī) を支配の座としてもつ王統 (rāṭchawong) の歴史である。もしそうであるならば、自己の王統の支配と無関係な時代ないし領域について「王朝年代記」が沈黙するのは、むしろ当然のことといわなければならない。この点に関し「アユタヤ年代記」([Phrarāṭcha] phongsāwadān Krung Si

Ayutthayā) と、王都 (Krung...) の名称とともに呼ばれている事実ははなはだ示唆的である。なぜなら、そこにこそ「年代記」の関心の所在の限定性が明らかに示されているからである。

III 『ラタナコーシン王朝年代記』

アユタヤは、1767年ビルマ遠征軍の攻撃を受けて壊滅的打撃を蒙り、その結果1351年以来416年続いた王国は滅亡した。その後、タークシン王の支配した15年間の「トンブリ王朝」を経て、1782年、現ラタナコーシン王朝がバンコクを王都として創建されたことは周知の通りである。

「ラタナコーシン王朝」の年代記としては、まず「小暦1157年本」系の「御親筆本」の末尾に小暦1152年(1790年)までの記事があることを指摘しておかなければならない。「御親筆本」とは1855年に、4世王の王弟ウォンサーティラートサニット親王が「小暦1157年本」など既存の年代記諸本をもとに作成した校訂本に、王自らが朱を加えてつくったといわれる年代記で、「王朝年代記」の校訂本としては最新層に属する。4世王の治世までの時代についてみると、「御親筆本」以後の時代に言及した「王朝年代記」の書かれた徴候はみあたらない。ところで前述「パレゴア本」には1834年までの記事が含まれているが、年代記にない小暦1152年以降の記事を書くについてパレゴアが何を底本としたか不明である。それがパレゴア自身の補筆である可能性を含め、今後の研究課題としておきたい。

さて、チュラロンコンが5世王として即位した年の翌年にあたる1869年、新王は時の外国総監ティパコーラウォン (Chaophrayā Thiphakōrawong Mahākōsāthibodī) に対し、「国家の榮譽、臣民の財宝たらしめるため、1世王より4世王までの年代記を順次編纂」

せよとの勅命を下した。ティパコーラウォンはこの勅命にしたがい、バムラプ親王の協力を得て、占星師の暦日記 (pum)、各役所の記録などの古文書に基づき、王朝創設より4世王の治世に至る『ラタナコーシン王朝年代記』を完成させた。ティパコーラウォンはその翌年にあたる1870年に死去している。この年代記は、タイ式横折本全100巻に及ぶ大冊であった。しかし、現王朝の先王たちの治世の記録を、出版という形で不特定多数の読者に提供することは慎重を期すべしとの配慮によるものであろうか、ティパコーラウォンの年代記はながらく王宮内の「御文庫」に収蔵されたまま、一般の目には触れなかった。5世王がその出版を思い立ったのは、『ラタナコーシン王朝年代記』が完成して30余年ものちのことである。

ティパコーラウォンの遺著は、5世王のもっとも信頼する部下であり同時に自身歴史学者でもあった異母弟ダムロン親王の校閲を経たうえで、1901年、ティパコーラウォン著 *Phrarātchaphongsāwadān Krung Ratanakōsin Ratchakān Thī Nūng khōng Chaophrayā Thīphakōrawong* (『ラタナコーシン王朝1世王年代記』) として上梓された。

5世王は『1世王年代記』に続いて『4世王年代記』までの『ラタナコーシン王朝年代記』が順次印刷刊行されることを期待していた。しかし『2世王年代記』は、5世王の生存中にはついに刊行されなかった。その間の事情についてダムロン親王はつぎのように述べている。

ひき続き『2世王年代記』の改訂にとりかかってみると、よるべきただひとつの底本である「ティパコーラウォン本」がはなはだ杜撰であることに気づいた。これは2世王時代関係史料が不足しているという事情のほか、この著述が短時日の間に行われたという事情が災いしたのであろう。そ

こで、わたしは「ティパコーラウォン本」を改訂上梓するだけでは世を益することすくないのみならず、陛下の御遺志にもそぐわないと考え……以来もっぱら関係史料の渉猟に時を費やした。その結果、年代記改訂の作業は一時中断の止むなきに至ったのである。

5世王崩御後4年を経た1914年、異母弟のワチラヤーン親王の嚙嚙を受けたダムロンは、ようやく改訂作業の再開を決意し、2年後にこれを完成出版した。戦後1961年になってようやく出版されたティパコーラウォン原著の『2世王年代記』と比較すると、ダムロンの『2世王年代記』は前者の改訂ではなく、まったくの新著であったことがわかる。ダムロンによる「ティパコーラウォン本」の改訂の作業は、結局のところ『1世王年代記』にとどまった。『3世王年代記』、『4世王年代記』は、立憲革命後の1934年、ほぼ原文のまま相次いで上梓されている。

なお、ティパコーラウォンが執筆できなかった『5世王年代記』については、ダムロン親王が、1932年に起きた立憲革命後ペナンに亡命中に、5世王時代のごく初期の治績につき12章にまとめたものが、1950年に *Phrarātchaphongsāwadān Krung Ratanakōsin Ratchakān Thī Hā* (『5世王年代記』) と題して出版された。

IV 「スコタイ王朝」の「発見」

ティパコーラウォンの『ラタナコーシン王朝年代記』の完成によって、タイは、1351年のアユタヤ建設から1868年のラーマ4世王崩御に至る、官撰年代記をもつことになったが、アユタヤ以前の歴史についてはその後もなお『北方諸国史』の段階を低迷していた。タイ歴史学がつぎの段階へと発展するのは、今世紀に入っての刻文研究の画期的発展をま

たなければならない。

タイにおける石刻文の史料価値に注目してその解読を試みた最初のタイ人は、4世王モンクットである。現存するタイ語碑文のなかで最古の年次をもつ、いわゆる「ラーマカムヘン王碑文」(第1碑文)は、1833年、当時まだ僧籍にあったモンクットが、リタイ王のクメール語碑文とともにスコータイで発見し、これをバンコクに将来したものである。モンクットは自ら解読したこの碑文の内容を、1855年、通商条約締結のためバンコクを訪れた英国使節ポーリング卿に説明したことが、ポーリングの著書 *The Kingdom and People of Siam* (Sir John Bowring, London, 1857, 『シャム王国誌]) のなかにみえている。同碑文の全訳は、1863年バンコクを訪れたドイツ人旅行家 A. バスチアンによっではじめて試みられ、1865年、*Journal of the Royal Asiatic Society of Bengal* 誌上に発表された [Bastian 1865]。その後1884年と1895年の2度にわたり、フランス人シュミット神父がこの改訳を発表したが [Schmitt 1885; 1898]、現在の研究水準からみてほぼ満足すべき内容をもつ翻訳が C.B. ブラドレーの手で完成するのは1909年のことである [Bradley 1909]。C.B. ブラドレーは宣教師 D.B. ブラドレーの子としてバンコクで生まれたタイ語学者で、ダムロン親王の協力を得てこの新訳を完成させた。

1914年、*Phrarāṭchaphongsāwadān Chabap Phrarāṭchahatthalēkhā* (『御親筆本王朝年代記』) を校訂出版したダムロンは、アユタヤ建設以前のタイ史にもまた強い関心を抱いていた歴史学者のひとりである。かれは同『年代記』の冒頭に付した長文の解説のなかで、王都 (rāṭchathānī) の位置の変遷を指標として、「スコータイを王都とする時代」、「アユタヤを王都とする時代」、「ラタナコーシン [=バンコク] を王都とする時代」とい

うタイ史の3時代区分を提唱するとともに、「スコータイを王都とする時代」に関する史料として、3点の碑文を含む11点の史料について詳細な解読を行うことにより「前アユタヤ史」研究への展望を開いた [Damrong 1914a]。

こうしたタイ国内における研究の動向に呼応して、海外においてもまたタイの碑文に注目する学者があらわれた。1904年以来カンボジア碑文研究に目覚ましい業績をあげつつあった、フランス極東学院インドシナ文献学教授 G. セデスである。セデスは、ダムロンが『御親筆本王朝年代記』校訂を出版するといちはやくこれを *BEFEO* 誌上に紹介するなど [Coedès 1913]、タイ史に関してもなみなみならぬ関心を示していたが、その後、得意とするクメール語およびインド古典語の知識を駆使してリタイ王クメール語碑文に精密な検討を加えた。この碑文は、かの「ラーマカムヘン王碑文」とともにモンクットの手でスコータイから将来されたものである。セデスは、この研究に15・6世紀にタイで作成された2点のパーリ語文献解読を加えて、*Documents sur la dynastie de Sukhodaya* (「スコータイ王朝に関する史料」と題する論文を *BEFEO* 誌上に発表した [Coedès 1917]。その翌年セデスはダムロン親王の招請に応じてタイに赴いた。かれは1918年から1929年まで12年にわたってバンコクに滞在する間、バンコクの「国立ワチラーン図書館」(The Vajirañāṇa National Library) の主席司書として、同図書館の近代化に尽力した。さらに1927年から1929年までの3年間、王立翰林院事務局長 (Secretary General) となってタイ研究の発展につくした。

来タイ後のセデスは、ラーマカムヘン王碑文 [Coedès 1918]、ナコーン・シーチュム碑文 [=リタイ王碑文] [Coedès 1919] と、つぎつぎにスコータイ碑文の研究を発表した

が、1920年には、Royal Asiatic Society of Great Britain and Ireland, Société Asiatique, および American Oriental Society 合同学会において *Les origines de la dynastie de Sukhodaya* (「スコータイ王朝の起源」) と題する報告を行なった [Coedès 1920]。この報告は、翌1921年には英訳されてバンコクの *Journal of the Siam Society* (『シャム協会紀要』) に転載されている。この論文は、スコータイ王朝 (the Sukhodaya dynasty) が「歴史的に確認できるシャムの最初の王朝」 (the first historical Siamese dynasty) であることを欧文をもって、はじめて明確に紹介した論文として世界の学者の注目をひいた。「スコータイ王朝」とは、ダムロン親王の3時代区分の「スコータイを王都とする時代」 (mūa Krung Sukhōthai pen rāchathānī) に対応する概念である。セデスはその後もスコータイ碑文の研究を進め、1924年、15点のスコータイ碑文の厳密に校訂されたテキストを、タイ語およびフランス語による全訳とともに収録した *Recueil des inscriptions du Siam, première partie : Inscriptions de Sukhodaya* (『スコータイ碑文集成』) を出版して、その後のスコータイ研究の確実な基礎を築いた。

V ダムロンによる「シャム＝タイ国史」 構成の試み

ダムロン親王は、1924年6月28日から5回にわたり、チュラロンコン大学において「タイ国史」の特別講義を行なっている。この時の講義の内容は、翌1925年1月、*Sadaeng Ban'yāi Phongsāwadān Sayām* (『シャム史講義』) の標題のもとに出版され、現在でもこれを見ることが出来る [Damrong 1924]。ダムロンの『シャム史講義』は、碑文研究を中心とする当時の第一線の研究成果の上に、あらたな「タイ国史」の枠組を構築しようと

した最初の試みとして評価される。ダムロンはその序文のなかで、講義の目的が「『年代記』の内容を祖述する」ことではなく、「『歴史の』真実はなにかについての研究の成果に基づいてシャムの歴史 (phongsāwadān Sayām) を記述する」ことであると述べ、それゆえ解釈の誤りもありうると、あらかじめ自らの立場の新しさを強調している。「目次」によれば、講義の構成はつぎの通りであった。

第1講

- (1) タイ族支配以前のシャム国 (Prathēt Sayām)
- (2) タイ族によるシャム国の支配
- (3) 興隆期のスコータイ (Krung Sukhōthai)
- (4) 衰亡期のスコータイ

第2講

- (1) アユタヤ (Krung Sī Ayutthayā) 建設
- (2) アユタヤの版図拡大
- (3) アユタヤの統合

第3講

- (1) 大戦争時代のアユタヤ (前)

第4講

- (1) 大戦争時代のアユタヤ (中)

第5講

- (1) 大戦争時代のアユタヤ (中)
- (2) 大戦争時代のアユタヤ (後)

ここで、「大戦争」(Mahāyutthasongkhram) とは16世紀以来繰り返し戦われたビルマとの戦争を指すが、『講義』は、これらの戦争の結果1569年に発生したアユタヤの第1次陥落という事態と、ナレスエン大王の活躍によるビルマ軍撃退、およびシャム国の独立回復の達成をもって終了している。

この講義が行われた当時、今日のタイはシャム国 (Sayām Prathēt, Prathēt Sayām) と呼ばれていたが、ダムロンはそのシャム国の歴史を (1) シャム国という政治地理的空間に

展開した歴史をになった民族はだれであったか、(2)そこに成立した国家の「王都」(rātchathānī)の位置はどこであったか、というふたつの視点を中心に再構成しようとした。そして、現在のタイの中心的民族であるシャム族が、モンゴル族に圧迫され、故地である中国南部から南下し、当時クメール族の支配下にあったスコタイをクメール族の手から奪いとり、これを首都とするタイ族の国家を建設した時点をもって「シャム史」の開始としたのである。ダムロンは、仏暦1800年(西暦1257年)ごろスコタイで即位したシー・インタラーティットを、「シャムを支配した最初のタイ人の王」(pathomkasat thai sūng dai pokkhrōng Sayām Prathēt)とした[*ibid.*: 16]。

ダムロンがこのような説を立てた背景には、ラーマカムヘン王碑文、ナコーン・チュム碑文など重要なスコタイ碑文の正確な内容が、セデスの努力によってほぼ完全に確定されたという、根本史料研究の飛躍的發展という事情が存在する。セデスは、のちに「第2碑文」と呼ばれるようになるこのクメール語碑文の解説から、ムアン・バーンヤーン、ムアン・ラートというふたつのタイ族の土侯国連合軍が、クメール人太守をスコタイから駆逐したのち、ムアン・バーンヤーンの土侯がスコタイ王として即位し、シー・インタラーティットを号したという歴史的事実を提示することによって、かれのいうところのシャム国最初の王朝スコタイ王朝創設の背景を明らかにしたのである。

前述の通り、ダムロンはすでに1914年の段階において、「シャム史」の展開をスコタイからアユタヤへという首都の移動によってとらえようとしていた。ダムロンのこうした見解を補強するうえに大きく貢献したと思われるのは、「国立ワチラーヤーン図書館」の中国語専門家ルアン・チェーンチンアクソー

ン(Luang Chenchin'akson, のち Phra に昇進)による暹羅関係漢籍史料の翻訳紹介である。かれは1909年に、『皇朝文献通考』、『欽定統通志』、『明史』、『欽定統通典』、『広東通志』という5種の中国史料から暹羅関係の記事を抜粋し、これをタイ語に翻訳して5世王に献上した。これはのちに Prachum Phong-sāwadān (「タイ史料集成」)に収録されることとなり、1917年その第5集として出版された[Phra Chenchin'akson 1917]。今日の水準でみれば、文献の選択と翻訳の内容に多くの問題があるとはいえ、この訳業は「暹」(=スコタイ)が「羅[斛]」(=ロップリ、すなわちのちのアユタヤ)を合わせて「暹羅」が成立したとする『明史・暹羅伝』の見解をはじめタイ語で紹介することによって、「スコタイからアユタヤへ」というシャム史の見方をタイ人史家の間に定着させることに貢献したと考えられる。われわれはここで構成されたシャム史の枠組の延長線上に、「スコタイ時代」、「アユタヤ時代」、「トンブリ時代」、「ラタナコーシン時代」という、その後今日まで行われているシャム史時代区分の原型をみることができる。

上にみたように、ダムロンはかれの講義を「ボンサーワダーン」と呼んだ。しかし、それが「タムナーン」とともに伝統的なタイの史書の類型をなす「ボンサーワダーン」を意味していないことは、かれ自身の言葉からも明瞭である。ダムロンはタイにおける近代歴史学の父と呼ばれている。しかし、そのダムロンもまた、はじめは近代的歴史記述である「プラワティサート」を知らなかった。この間の事情を、われわれは以下に引用するダムロンの書簡の一節から知ることができる。この書簡は、ペナン亡命中、異母弟であり学問の友でもあったナリット親王(Prince Naris)との間に交わした往復書簡集 *Sān Somdet* (『サーンソムデット』)に収録されているも

ので、1934年12月2日の日付をもつ [Khurusapha 1962: 269, 288]。

わが国で「ポンサーワダーン」と呼ばれている書物は、『アユタヤ王朝年代記』にせよ、ティパコーラウォンの『ラタナコーシン王朝年代記』にせよ、「記録」(chotmäihet)、つまり英語でいうところの“chronicle”で、重視されるのは日付であります。そこでは、なにがいつ起こったかが、日付の順に記述されるのです。こうした歴史記述の方法は「プラワティサート」、すなわち history の理論には合致しません。歴史理論もまた時間を重視するのは当然ではありますが、時間的前後関係を論ずるにあたって、次の3点を考察するところが違います。第1に、その事件はどのようにして発生したのか？ 第2に、その事件はなぜ発生したのか？ そして第3に、それはいかなる結果をもたらしたか？ 「プラワティサート」はこれらの点に検討を加えることを原則とします。なぜなら「プラワティサート」(history)とは「例証の学」(science of example)だからなのです。わたしが『ラタナコーシン王朝1世王年代記』を編纂したとき、わたしはまだこの歴史理論に触れていなかったもので、昔流にしたがいましたが、のちに『2世王年代記』を編纂したときは、すでに歴史理論を学んでいましたので、叙述の方法をあらため、いま説明した方法で歴史を叙述したところ、たいへん好評を得ることができました。

ダムロンは『1世王年代記』が刊行された1901年から『2世王年代記』を書いた1916年までの間に、おそらくは英語を通じて、新しい歴史記述の方法を学んだものと考えられる。歴史的事件を単に羅列する伝統的な「ポンサーワダーン」を批判し、歴史的事象の背後にある因果関係の解明を志向したダムロンの歴史記述の態度は、たしかに近代的意味に

おける歴史、すなわち「プラワティサート」に限りなく接近しているということが出来る。その意味において、ダムロンはタイにおける歴史学の父と呼ばれるにふさわしい学者であった。しかし、そのダムロンも、近代歴史学の重要な貢献である「史料批判」に関しては、かならずしも厳密ではなかった。ダムロンは、当時スコタイ時代の作と信じられていた *Nangsū Nāng Nopphamāt* (『ノッパマート伝』)にみられる後世のざん入を指摘してその史料価値に疑義を提起するなど、史料批判についても一応の理解を示しはしたが、次節にとりあげるニティの所説にみられるような史料批判の段階にまでは到達していない。さらにまた、ダムロンがスコタイからアユタヤへという歴史発展の図式を提示し、これが定説化したことにより、1351年以前のアユタヤ史の自由な研究がながく阻害されたという事実は指摘しておかなければならない。

VI おわりに：「ポンサーワダーン」は いかに読むべきか？

タイ語に「チャムラ」(chamra)という動詞がある。*Photchanānukrom Chabap Rātchabandit Sathān Phō. Sō. 2525* (王立アカデミー版『国語辞典』)によると、この語には(1)「洗って清潔にする」(例：chamra rāngkai, 身体を洗う)、(2)「直してよくする」(例：chamra phratraipodok, 『三蔵経』を校訂する)、(3)「審査して決定する」(例：chamra khwām, 事件を審理する)、(4)「支払う」(例：chamra nī, 負債を清算する)という意味があるという。このうちの第2義は、ヨーロッパの言語では、それぞれ to revise, reviser, bearbeiten などという訳語があてられている。

『三蔵経』を校訂する」とは、いくつも

のテキストを比較することによって、もっとも原テキストに近い最良の『三蔵経』テキストを再構成する作業である。これは、対象とするテキストには、改変、挿入、省略など後人の手が加えられて、あるべき姿が歪められている可能性があるという認識のもとに、それを「よい状態」にもどそうとする知的営みである。校訂後のテキストは校訂前のテキストより「よくなる」ことが了解されている。

『三蔵経』の校訂の場合には Urtext の再構であって、かりに Urtext が発見されたとすると、その Urtext と合致する校訂本が最良の校訂本ということになる。

ところで、テキストの校訂は『三蔵経』に限られてはいない。著名な例では、1805年に行われた『三印法典』「チャムラ」の事例が知られている。このときの状況は『三蔵経』の例とはすこしく異なる。1世王が『三印法典』の「チャムラ」を命じたのは、不条理な裁判が行われたことを知った1世王が、裁判官の依拠した法典の内容を検討せしめたところ、王が不条理と感じた通りの内容が法典に記載されていたので、しからばかかる法典のテキストは、かならずや後人の手で歪められたに違いないものと判断して、ただちに現行法典全テキストの「チャムラ」を命じたものである。

この場合「良否」の判断の基準は「正義」(yuttitham)であった。この間の事情を記した『三印法典』の序文には「〔王は、法典の〕誤った条項を、正義に適うようあらため給うた」とある。「あらため給うた」と訳したタイ語の原文は“song chamra datplaeng sǔng bot an wipalat nan”である。下線部分のうち、“datplaeng”は、同じ『国語辞典』によると「ふさわしい形へとあらためる」という意味の動詞である。ここでふたつの問題が生じる。第1は「正義」の内容である。おそらくこれの解答は「プラタマサート」(Phra-

thammasāt) がそれであるということになるが、²⁾ タイ語の「プラタマサート」の抽象的な内容を知る者にとって、この答ではかならずしも明快な解答を与えられたことにはならない。しかし、かりに百歩譲って「プラタマサート」の示す「正義」の内容が明瞭であったとしても、テキストの内容がその正義に「適う」か「ふさわしい」かの判断を下すのは、あくまでも国王である。正義は「チャムラ」する国王の側にある。

われわれはさきにダムロン親王が『御親筆本王朝年代記』や、ティパコーラウォンの『ラタナコーシン王朝1世王年代記』を校訂して、これを出版したことに触れた。この場合の「校訂」もまた「チャムラ」である。「王朝年代記」もまたしばしば「チャムラ」の対象となってきた。歴史学者ニティ(Nidhi Aeusrivongse)は、上述した「チャムラ」のもつ、特殊タイ的な意味に着目し、これを手がかりに『アユタヤ王朝年代記』の内的批判を試みようとした。

「王朝年代記」(phrarāṭchaphongsāwadān) というものは、国王の regalia のひとつと考えられている。それは国王の命を受けた王の家臣の手によって作成される。「年代記」の「チャムラ」もまた同様である。ニティはまず、現在完本の形で伝承されている『アユタヤ王朝年代記』詳述本が、すべてラタナコーシン王朝期に入ってから「チャムラ」されたという事実に注目する。「チャムラ」という行為の性質上、現存の『アユタヤ王朝年代記』詳述本には、「チャムラ」の主体であるラタナコーシン王朝の諸王の価値判断が投影しているはずである。なぜなら、ラタナコーシン王朝の王たちは、自己の基準に照らし

2) 「プラタマサート」と「正義」の概念については拙稿「タイの伝統法——『三印法典』の性格をめぐって——」『国立民族学博物館研究報告』8巻1号(1983年3月)参照。

て、アユタヤ王朝の諸王の経験を再評価しているに違いないからである。このように考えたニティは、『アユタヤ王朝年代記』詳述本完本の諸写本を、アユタヤ時代に製作されたと推定される「年代記」の断簡、およびその他の同時代アユタヤ史料と比較して、そこから、ラタナコーシン王朝によって加えられたと推定される改変——誇張、強調、意識的・無意識的省略、挿入、増広——を抽出し、これを行わしめた諸王の意図を見出そうとしたのである [Nidhi 1980]。この作業の結果、ニティは、ラタナコーシン王朝1世王の行なった『アユタヤ王朝年代記』の「校訂＝チャムラ」が、アユタヤ王朝最後の王家であった「バーン・プルルアン王家」を貶めることにあったこと、そしてラタナコーシン王朝は、仏教的価値を統治原理の中心にすえ、仏教的理想王に正統性原理をもとめようとしたことを見出したのであった。「年代記」製作者の「存在拘束性」を史料の内的批判にとり入れたニティの業績は、「ポンサーワダーン」の利用のあり方に大きな示唆を与えているといえよう。

以上の考察から「ポンサーワダーン」について、つぎのような問題点を指摘することができる。第1に、「ポンサーワダーン」は、ある王都 (rāṭchathānī) に君臨する王統 (rāṭchawong) の年代記である。王都が移れば、あらたな「ポンサーワダーン」が製作されなければならない。紙数の余裕なく、本稿では触れられなかったが、ひとつ注意しておきたいのは、ここでも「王統」と訳した rāṭchawong (=rājavamsa) は、wong (vamsa) すなわち「血統、家系」を語源としながらも、「王家」を超えた概念であるという点である。アユタヤを王都とした「王家」は、「ウートン」(1351-1370)→「スパンナプーム」(1370-1388)→「ウートン」(1388-1395)→「スパンナプーム」(1395-1569)→「スコータ

イ (=タンマラーチャー)」(1569-1629)→「プラーサートーン」(1630-1688)→「バーン・プルルアン」(1688-1767)と数次にわたり交替しているが、『アユタヤ王朝年代記』はこれらをすべて含めている。ただし、各王家が独自に『年代記』を製作または「チャムラ」した可能性はあり³⁾、利用にあたってはこの点についても注意が肝要である。第2に、「ポンサーワダーン」が「王朝年代記」として国王の勅命によって製作されるという事実である。したがって、そこに収録された記事は、なんらかの意味において、製作者である国王の価値意識を反映しているとみることができる。ニティはこの点に注目して「ポンサーワダーン」を知識社会学の材料として利用したのである。

参 考 文 献

- Bastian, Adolf. 1865. On Some Siamese Inscriptions. *Journal of the Royal Asiatic Society of Bengal* 34 (1): 27-38.
- Bradley, C. B. 1909. The Oldest Known Writing in Siamese, the Inscription of Phra Ram Khamhaeng of Sukhotai 1293 A. D. *JSS* 4(1): 1-64.
- Busakorn Lailert. 1968. Phrarāṭchaphongsāwadān Krung Sī Ayutthayā. *Silpakon* 12(2): 89-93.
- Charnvit Kasetsiri. 1976a. *The Rise of Ayudhya, a History of Siam in the Fourteenth and Fifteenth Centuries*. Kuala Lumpur: Oxford University Press.
- . 1976b. Thai Historiography from Ancient Times to the Modern Period. In *Southeast Asian History and Historiography*, edited by C. D. Cowan and O. W. Wolters, pp. 156-170.
- Chenchin'akson, Phra. 1917. *Prachum Phongsāwadān Phāk Thī* 5. Bangkok. (Cremation Volume)
- Chinese Repository*. 1833-1851. Canton.
- Chit Phumisak. 1983. *Sangkhom Thai Lum Maenam Chaophrayā Kōn Samai Sī Ayutthayā*. Bangkok: Mai Ngam.

3) アユタヤ時代における「王朝年代記」の製作および「校訂」(chamra) に関しては、Nidhi [1980] に詳しい。

- Coedès, G. 1913. *Vararaj Vamsavatara: The History of Siam, from A. D. 1350-1809, according to the Version of Somdet Phra Paramanujit, with the Corrections of King Mongkut...* Bangkok, 1913. 3 Vols. *BEFEO* 13: 7-8.
- . 1917. Documents sur la dynastie de Sukhodaya. *BEFEO* 17: 1-47.
- . 1918. Notes critiques sur l'inscription de Rama Khamheng. *JSS* 12: 1-27.
- . 1919. L'inscription de Nagara Jum. *JSS* 13: 3-43.
- . 1920. Les origines de la dynastie de Sukhodaya. *JA* I: 233-245.
- . 1921. The Origin of the Sukhodaya Dynasty. *JSS* 14(1): 1-11.
- . 1924. *Recueil des inscriptions du Siam I, Inscriptions de Sukhodaya*. Bangkok. (Cremation Volume)
- Damrong Rajanubhab. 1914a. Tamnan Nangsü Phraratchaphongsawadān. In *Phraratchaphongsawadān Chabap Phraratchahatthalēkhā Lem I*. Bangkok. (Cremation Volume)
- . 1914b. Kansüksa Hā Khwāmür Phongsawadān lae Tamnān Kānkao. In *Prachum Phongsawadān Phāk I*. Bangkok. (Cremation Volume)
- . 1916. *Phraratchaphongsawadān Krung Ratanakōsin Ratchakān Thī 2*. Bangkok. (Cremation Volume)
- . 1924. *Sadaeng Ban'yāi Phongsawadān Sayām*. Bangkok: Chulalongkorn University (?).
- Felliozat, Jean. 1970. Notice sur la vie et les travaux de M. George Coedès. *BEFEO* 57: 1-24.
- Griswold, A. B.; and Boisselier, Jean. 1961. Travaux de M. George Coedès, Essai de bibliographie. *Artibus Asiae* 24(3/4): 155-186.
- Khurusapha, Ongkankha. 1962. *Sān Somdet, Lem 4*. Bangkok: Ongkankhā Khurusaphā.
- Nidhi Aeusrivongse. 1980. *Prawatisāt Ratanakōsin nai Phraratchaphongsawadān Ayutthayā*. Bangkok: Ekalaknangsudi.
- Pallegoix. 1850. *Grammatica Linguae Thai*. Bangkok: Typographia Collegii Assumptionis.
- Prasert Na Nagara. 1971. Wan Sāng Krung Si Ayutthayā. In Prasert, *Phonngān Khonkhwā Prawatisāt Thai lae Rūang Khōng Klua (Mai) Khem*, by Prasert Na Nagara. (Cremation Volume)
- Schmitt, M. 1885. *Deux anciennes inscriptions siamoises transcrites et traduites par M. Schmitt*. Saigon: Imprimerie Coloniale.
- . 1898. Transcriptions et traduction par M. Schmitt des inscriptions en pali, khmer et thai recueillies au Siam et au Laos par Auguste Pavie. *Mission Pavie, Etudes* 2: 167-492.
- Tri Amatayakul. 1962. Phūtaeng Nangsü Phraratchaphongsawadān Chabapphim 2 Lem. *Silpakon* 6(1): 25-34.
- Wyatt, David K. 1976. Chronicle Traditions in Thai Historiography. In *Southeast Asian History and Historiography*, edited by C. D. Cowan and O. W. Wolters, pp. 107-122. Ithaca; London: Cornell University Press.